

～倅せの土台をつくる～

ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。

=====

関係者の皆様

このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。

=====

1. 新規利用者募集枠
2. 支援ノートNo.112『障害福祉と科学②』
3. 近況
4. メディア関係案内
5. 研修・講演

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援 ○ 余裕あり
- ◆ 就労継続支援B型 × 来年度については、都度お問い合わせください
- ◆ 生活介護 × なし
- ◆ 就労定着支援 △ ftlの事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援 × ftlの事業所を利用する方以外の受入不可

2. 支援ノートNo.112『障害福祉と科学②』

● 障害福祉実践と科学

全ての科学的手法は、新たな推論を構築する努力を放棄しないことによって、その要件を満たす。つまり、科学的な根拠と言われるものは、常に更新される運命に曝されており、科学とは節操のないものである。科学におけるこのような気持ちは、不確定部分を最小にしようとする動きに他ならない。とかく思考停止に陥ったり、手段の目的化が起こったりしやすい障害福祉の現場が、科学から学ばなければいけないことかもしれない。

障害福祉を職業として選択する人たちを大きく二手に分かすと、その第一が「不幸な不治の障害を負った人たちのお世話をする」という一群である。第二が「相手に起こりうる人格の陶冶と発達をリアルタイムに感じる」一群である。かなり強引にはなるが、前者はパール・バックの『母よ嘆くなかれ』を想起させ、後者は糸賀一雄の『この子らを世の光に』を想起させる。僕は前者を批判しない後者の人である。従って、以降は後者（第二群）の障害福祉実践を対象に書くことにする。

第二群における障害福祉は、トータルでみると定量化し難いものを扱う。常に「これでいいのか？」という不安に駆られる。賭博とまでは言わないが、競輪、競馬、株式取引のような、定式のない不安定さがある。それ故に、そこから逃げようとして科学にあやかりようとする。しかし、科学的であることだけが不安を逃れる手段なのかというと、そんなこ

とはない。これを福祉の現場は忘れがちである。

例えば、駆け出しの援助者が持っている純粋な熱意も、ベテランが持っている直感や熟練も、共に不安を軽減させる。しかし、これらは、データサイエンスと違って、過去の情報から不安を軽減させるのではない。熱意も勘も、事態を打開進展させようという信念が基礎にあり、変化を増幅させて知覚することでアプローチにつなげる。これは諸刃の剣で、ノイズに弱く乱されやすいという弱点を持つが、未知との遭遇を乗り越えていくには、この力が不可欠になる。

先月の小欄 (No.111)で述べた、お湯の温度を計測する例え話からもわかるが、データサイエンスだけをもって、100%確実な実践を行うことはできない。同じように、福祉の現場からもあらかじめ完全なデータを得ることは不可能である。データサイエンスは、この不確実性を減らすために現れたものであるが、理論的に完全な克服はできない。なぜなら、どのようなデータをかき集めようとも、そのデータは過去の事実に基づくものであり、時遅れだからである。この動かしようのない事実を受け止めて、現場は科学を使う必要がある。

生の実践は、常に未踏峰に挑む登山と同じである。ある相手への援助で上手くいった援助が、似たような別の相手には全くはまらないということはよくある。また、はまっただとしても、後で検証してみると、それは援助者側で新たな相手に合わせて微調整した痕が認められるものである。その微調整が、何を根拠に行われたのかについて検証してみると、どうも後付けした理由しか出てこないことも多い。つまり、微調整する瞬間は、時遅れのデータ+徴候をとらえての先読みによって判断しているのだ。先読みは直感であり、直感を論理的に説明することはできない。

例えば気象学においては、膨大な過去データを使って気象というカオスを科学的に分析するのであるが、僕らが日常的に接する天気予報は、過去データだけで成り立つものではない。特に気圧配置が安定していない時期については、週間予報などはほぼ全滅である。台風の進路予想が当たる確率は70~80%だと聞いたことがあるが、おそらくこの確率は、1年間に発生する全ての台風を対象にして計算されたものだろう。いわゆる迷走台風のようなものも含めた「台風シーズン」に限定して計算すれば、当たる確率は大きく低下するはずだと思うが、果たしてどうだろうか。

天気予報は、数学的な計算だけで完結するのかもしれない、そうではない。最後の最後は気象予報士の直感に頼る。だから、この予報には気象予報士の人柄が反映される。気象予報士ごとに予報の内容が異なるのは、そのためである。福祉の実践も、天気予報と似たようなところがあるのではないか。最終的には、意識下にある情報を瞬時に収集統合し、援助者の洞察力と直感によって行動(判断)している。緊急時の「火事場の馬鹿力」も同じような形で発揮されるのだろう。また、いくつもの「科学的根拠」のうち、どれを目の前にいる相手に当てはめて考えるのかについての判断も多分に直感的である。現場で「科学的な根拠」を生かしたければ、「勘」や「直感力」を磨かなければならないという逆説がここに見られる。

上記の他にも、スポーツ、将棋や囲碁、戦争、経済など、実践現場における同様の例はいくらでもある。科学と勘や直感という非化学的なものは相補関係にあり、ひとつの空間に併存しながら、時に交差し、時に重なり、時に並行し、時に離れる。そして、科学は最

後の判断を直感にゆずる。

- 言語的か非言語的か

僕たちは、言語や数値で表現したり比較したりできるものを科学的、その逆を非科学的とする傾向がある。ただし、これは優劣とは関係のない分け方である。

自転車の乗り方についての説明を言語化するならば、分厚い本を何冊も書く必要があるだろう。子どもに自転車の乗り方を教える時に、そんなものを用意して読ませても意味がない。それよりも、子どもと一緒に外に出て、数日練習に付き合った方が、早く確実に教えられることは周知の事実である。これは、陳述できない手続き記憶と呼ばれるものを使った学習である。福祉実践の神髄を独学で学べないのはなぜかを考えた時に、自転車の練習と同様のイメージを持つのは僕だけだろうか。

福祉実践がひとの人生を支援するものであるならば、その根底にはリアリズムが脈打っていないといけないと思う。フワフワとした夢物語を100描いたとしても、その中に実現可能なものが含まれていなければ、何の意味もない。指をくわえてご馳走を眺めているうちに栄養失調で倒れてしまったのでは、支援とは言えないだろう。科学は、このフワフワしたものを整理していく。現実的に達成できそうなものに焦点を当てる。リアリズムこそ科学的なものである。幸福実現に向けた援助をすることが福祉実践の核心部だとするならば、その時と対象を選ぶ際に、陳述可能な科学を上手く使いこなさなければいけない。ただし、ひとがこれを選ぶのであり、選ぶひとの直感は言語化できず、必ずしも科学的なものだとも言えない。直感を磨くことを避けて通れば、そのひとは科学に負けるだろう。

実践者の必要条件是、あくまでも手続き記憶を駆使した上級スキルである。これらは、発生したエラーを飲み込み、さらに活用する柔軟な構造（resilience）を持っている。

脳波も知能検査も作業療法も生活療法も、基本的にはアナログなものであり、フローとして感じとる対象である。つまり、脳波の波形であれ、それをデジタル化（数値化・色彩化）した大量のプロフィールであれ、知能検査の数値であれ、生活上の変化であれ、それを目にした時の「あっ！」という感嘆詞に近い感覚や、その趣を大切にしなければいけないことに違いはないだろう。頸椎のレントゲン写真をバチッととって、c4とc5が変形しているとか、ストレートネックになっているなどと診断をつけるときであっても同様である。しかし、これについても、アナログの非言語データを想像できなければ、真実と解離したものになってしまうだろう。

言語的なものは、論理的であり因果論的であるから、どこか指示的である。逆に、非言語的なものは、雰囲気であり、断定しない大らかさをまとっており、表出的である。これも、優劣はつかず、暮らしには両方の要素が必要だとしか言いようがない。どちらか片方しかなかったら、果たして人間社会が成立可能であるかどうかを考えてみればわかることだろう。

結局、言語的なものと非言語的なものは相互に補完し合うのであり、最終的には非言語的な判断やアプローチで事態を動かすことになる。デジタルに整理された科学的な根拠を

説明するのはひとであり、その説明はそのひとの雰囲気や人柄という非言語的なものをまわってしまふ。例えば、僕は先日、記者会見に参加した。その後、唯一の事実である共同記者会見を紙面に記したいくつもの新聞記事は、新聞社ごとに随分と雰囲気が違っていた。これは、記者会見の様子を文字や文法という共通のルールを用いて表現する場合であっても、その記事を書く記者の人柄というアナログで非言語的なものが、滲み出てきてしまうからである。

人間から人間に浸透する情報は、指示的であることを超えて表出的であり、伝えることを超えて伝わる何かがあるのだろう。経験的に、自分が相手に何かを伝えようと思ってムキになっているときほど、自分が意識され過ぎていて、相手にとって危険な存在になっていると思う。逆に、自分があるのかないか分からないくらいのほうが、相手の変化によく気づけるし、いい付き合い（支援や援助）ができていような気がする。これも、言語的に説明することができないものである。

● 科学と技術を生かすコツ

障害福祉の実践を「科学に負けず、科学を使えるようにする」ための前提条件とは何だろうか。必要条件のひとつとしてあげられるのは、支援者ひとりひとりの神経に刻み込まれ、ここで考えられ、動作や行動に顕れる「思想」ではないかと僕は考えている。「思想」がしっかりしていなければ、どんなに科学的な情報と知識を大量に導入しても、あるいは立派なシステムという仏を作ってみても、それがどう活用されていくのかについての保証はできない。

糸賀一雄さんの言葉を借りれば、「福祉の思想は行動的な実践のなかで、つねに吟味され、育つのである」ということになる。ガンジーに言わせれば、「ゴチャゴチャ言っていないで率先して体現しろ」ということになるだろうか。脚下照顧であり、「システムを動かすには末梢から」というシステム論の基本でもあろう。

僕らの任務は、相手が世間の中にいながら成熟していく成り行きを支援することである。その逆を傍観することを「なさざるの悪」という。ひとは誰しも、「なさざるの悪は、とがめられることが少ない」ことを知っている。それ故に傍観者に成り下がる。一般に、大多数の無名で危険な支援者たちは、「なさざるの悪」に加担していることを自覚しない。職業支援者に限らず、世間にいる人たちの圧倒的多数がこれにあたる。彼らは、社会と障害者を分断しようとする。理由は様々で、危険回避のためであったり、保護という大義名分であったりする。なぜこのようなことが検証されることもなく、漫然と続いているのかというと、そのことを意識化するような評価項目がないからである。例えば、「強度行動障害としてのポイントを減らすこと」は、「当該障害児者が、社会の中で相互扶助の関係を築きあげつつ、“Weモード”になって生きていけるようになること」を導き出さない。しばしば「なさざるの悪」は、相手を対人関係や暮らしから遠ざけ、(対人・対社会関係の構築を最終目標としていない)薬物拘束との合わせ技により強度行動障害のポイントを下げる。つまり、この評価制度は、支援者目線の無意味な評価なのである。このような大きな流れに歯止めをかけるのが、福祉や医療における重要な役割のひとつであり、全体と

しての方向性である。そして、科学が実践の中に持ち込まれるときは、このような方向性に沿った形で使われることが求められる。そう考えて周囲を見回すと、はなはだ不安になってくるのは僕だけだろうか。

最も多い、「なさざるの悪」型支援者の反対側にあるのが、「視野狭窄」型の支援者である。一般的に言って、このでの支援者は「自分が支援しなければ、この人はダメになってしまうのではないか」という気負いとともに在る。周りから見ると、気負い過ぎなのであるが、そのことについて無自覚である。よくあるのが、自分の課題を相手に投影してしまい、視野が狭くなっている状態である。例えば、支援者が自分の親との関係に悩んだ経験があると、支援する相手もそうであるに違いないと思ひ込む。相手は痛くもない腹を探られることになる。しまいとその相手は、その支援者との関係こそが最大の悩みになってしまう。障害福祉の実践は、お互いのところが相手に巻き込まれやすい状況の中で行われるため、このようなことはかなり頻繁に起きる。困ったことに、支援者は善意であり、自分の見立ては的を射ていると思ひ込んでいる。そうであるが故に修正がかかりにくい。支援者であるあなたが、持続的に「彼（彼女）を救えるのは自分しかいない」と思う場合は、一步下がって距離をとって見たほうがいい。結果的に、ありがた迷惑な存在になっていることが多いからである。

ひとの人生を支援するという息の長い仕事をやり通すには、巡航速度の認識が必要である。瞬間的にはアクセルを強く踏み込んだり、ブレーキやハンドルの急な操作が必要になることもあるが、それを毎度続けていたのでは、相手も自分もまいってしまう。恋愛と同じ強度で結婚生活を送ろうとすれば、どんなに理想的なカップルであっても破綻するのと同じことである。

「おおぜいの中の一人」であり、同時に「唯一無二の自分」でもあるという矛盾の上に、詮索することなく乗っかっていられるようになること。これが、彼や彼女が社会参加するために必要な成熟である。それは、人々と競争したり、協働したり、折り合いをつけたりしながら生きる結果として身につくものではないか。僕らの任務の第一は、相手と一緒にあって、これを率先して体現していくことである。自分自身を省みても、このことが必ずしも上手くいくとは限らない。しかし、匙を投げずにつき合うことで、もうダメだと思った相手が息を吹き返すこともある。あるいは、支援者側の見立て違いに気づき、修正をかける機会を得たことで歯車が噛み合い出すこともある。

せっかちな人は、目にした事象を拙速に結論づけてしまい、過程として認識しない。どんな相手にも、加速すべき時と加速してはいけない時とがあるものだが、過程としての認識ができなければ、その判断を誤る。その誤ちは、相手にゆとりを作ることなく、相手を焦らせるという結果を呼び寄せる。忍び寄る焦慮の影は指数関数的にのび、ゆとりを覆い尽くしてしまう。そのようなことにならぬように布石を打ちながら援助することが、科学や技術を支援に生かすための土台になるはずである。果たして、障害福祉の制度設計は、全体をこのような方向へと誘導する形になっていると言えるだろうか。

- 科学を生かす障害福祉実現のために

最後に、科学に負けない、科学を生かすことができる障害福祉を実現するために、非科学的な僕たちにできそうなことを考えてみたい。

僕たちは科学者ではない。だから、謙虚になって科学を生かした援助をするのはいいとしても、科学的であることを前面に出す必要はないと思う。セールストークとしてこれをやっても、所詮は科学を生業としていない者である。科学的な説明ができないのであれば、「調べておきます」と言って、後で調べるのが誠実というものだ。

そもそも、人生に対する支援において、確実に言えることなどほとんどない。科学的に説明をして相手をおさえこんでしまおうとか、信頼を得ようとか、そういうやまっ氣を起ささないほうがいい。相手に過剰な期待を持たせることは、後々相手を幻滅させることになる。そんなことをして得する者は一人もいない。

契約制度だと言っても、障害福祉における契約は、家建てて施主に引き渡すのとわけが違う。何かを達成する契約ではなく、努力契約であるということであらかじめ断っておいたほうがいいくらいである。僕は以前、あるご家族から「ウチの子を絶対に就職させると言ってくれ」と涙ながらに頼まれたことがある。親心なのかもしれないが、僕は「その約束はできない」と、頑なに断り続けた。ご子息は、重度の知的障害とてんかん発作をもっていた。結局彼は、様々なハードルを越えて就職できたのであるが、あのとき僕が安請け合いしていたら、おそらく家族と呼吸が合わず、彼が就職することはなかったのではないかと思っている。

就職ができるとか、問題となる行動がなくなるとか、そんなことを占い師みたいに言うものではない。相手が施設にいるときにできることというのは、人生全体の何%かと考えてみればわかることである。どれだけ多くの変数が関与して、その後の経過が決まってくるのかについては、それこそ科学的に考えてみればいいのである。僕らの仕事は、相手に快感を与えることではない。多少は嫌がられることも覚悟しておくべきである。

色々と書き連ねたが、どれもこれも、ひととして透徹したものがないと、足下をすくわれそうなことばかりである。多少揺れるのはしかたのないことだが、道を踏み外すようでは困る。前回の小欄でも述べたが、科学そのものからは、「～すべき」「～してはならない」が、論理的に導きだされない。従って、これを扱う者が、科学的ではない形で「～すべき」「～してはならない」を導き出さなければいけない。科学に頼ると科学に負けるのである。実践で落とし穴に落ちないために、古来から生き残っている思想を紹介する。もちろん、これは障害福祉を職業にするひとを特に対象としたものではない。

仁（じん）、義（ぎ）、礼（れい）、知（ち）、信（しん）という言葉聞いたことがある人は多いと思う。これは、儒教の基本的な思想で、紀元前551年（今から2575年前）頃に中国で提唱されたものだ。これらは「五常」（ごじょう）とも呼ばれ、人間の行動を指導する原則とされている。それぞれの意味は次のとおりである。

- ・ 仁（じん）：他者への思いやりや慈しみの心。人間としての真心や愛情。
- ・ 義（ぎ）：正義や道徳的な正しさ。自分の利益よりも公正な行い。
- ・ 礼（れい）：礼儀や尊重。社会的な秩序を維持するための規範や礼節。
- ・ 知（ち）：知恵や知識。正しい判断をするための知見や理解力を指す。

- ・ 信（しん）：誠実さや信頼。約束を守り、信頼に足る行動を取ること。

このうち「仁」は、日常生活のいかなる場面にも溶け込んでいるものである一方、容易には到達できない。そのため、孔子はこれを至高の倫理だとしている。

孔子は、日常の中で五常を導き出す糸口として、四端という4つの感情を示している。それが以下である。

- ・ 「惻隱」（他者を見ていたたまれなく思う心）＝仁の端
- ・ 「羞惡」（不正や悪を憎む心）または「廉恥」（恥を知る心）＝義の端
- ・ 「辞讓」（譲ってへりくだる心）＝礼の端
- ・ 「是非」（正しいこととまちがっていることを判断する能力）＝知の端

以上は、どれも理屈として憶えるものではない。科学を生かす障害福祉を実現するために、一生涯を通して磨き、手続き記憶として身に染み込ませておきたいものである。

令和6年12月22日 高原浩

※ 支援ノートの文章は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されており、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3. 近況

【就労移行支援 ftlビジネス・スクール】 新規利用者募集中

知的障害（知的発達症）を含む発達障害（神経発達症）のかたたちがメンバーの中心になっています。眠くなるような講義ではなく、社会参加する体験を通して、企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な体験をその場にいるひとたちと分かち合いながら成長することを目指します。

チームとして協力し合い、折り合う体験を積む中で、個々に違う、ボトルネックとなっている課題を明確にします。具体的な傾向と対策をたて、就職に向けての援助を行います。

就職後に成長できる適職場に就けるような余裕を作ることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年6ヶ月）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

就労定着支援終了後も、OB会などを通じて、繋がりを大切にしています。ftlのほうから繋がりを切ることはしません。

令和7年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

【就労継続支援B型 ftlビー・ワーク】 随時お問い合わせください(現在定員オーバー)

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にした就労継続支援B型事業

所です。中長期的に企業就労を明確な目標にしている方にフィットしている事業所です。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、働き暮らすための自信とスキルを身に染み込ませます。

【発達保障型生活介護事業 ftlビー・ワーク】見学可(現在定員オーバー)

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』をベースにした生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「この子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障することを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域のかたたちといっしょに活動するプログラムも実施しています。

<http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/>

【就労定着支援事業】ftlの事業所を通過した方のみ利用可

就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。

<https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL>

【計画相談支援 ftlアクセス】ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております

児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

* 土曜プログラム・特別プログラムについて (ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です)

土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。

① どだいの会 (動作や感覚の統合・状況判断能力・社会性の発達を目指すトレーニング)
社会適応の障害になり得る発達の遅れは、脊椎を中心とした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えるときのヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室（PC技能訓練）

WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。ソーシャルスキルの訓練にもなります。

③「和太鼓講習」

市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。

<https://www.fujimitaiko.com/>

和太鼓の良さは次のような点にあります。

- 音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
- 耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
- アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。
- 腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気、楽しく真剣に学びます。年度後半は、「歯科講座」「インターネット・スマホと安全につき合うために」といった、自立に必須の内容も用意しています。

⑤“自立講座”“OBとの交流会”等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になります。どれも、絆を深め、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4. メディア関係案内（全て、全国の書店やインターネットから購入できます）

○『家族で支援する発達障害 自立した進学と就労を進める本』 高原浩 監修
河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/>

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で、自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html>

重版（3刷）好評発売中です。

○『飼い殺しさせないための支援』 高原浩 著 河出書房新社

*全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。

<http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/>

○『現場発！ソーシャル・インクルーシブとインクルーシブ教育』高原浩 著 学事出版
<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html>

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルーシブ教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

<https://www.kyoiku-press.com/post-211922/>

○ジョブメドレーアカデミー オンライン研修講師として登壇中（下記リンクは、案内のみです）

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

<https://jm-academy.jp/syougai-fukushi>

○NPO法人 日本インクルーシブ教育研究所 多様な発想支援士養成講座

『対人援助のコツ ～非施設的实践の現場から～』

<https://x.gd/TaItY>

<https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#i1-3>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5. 研修・講演について

- 通年 神奈川県立中井やまゆり園 支援改善アドバイザー
- 令和7年1月14日 社会福祉法人 武蔵野 職員研修
- 令和7年2月15日 社会福祉法人 朔日 NPO法人 朔日の会 児童・成人部門 職員研修

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下のお問い合わせフォームからどうぞ。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

<http://www.ftl-1.co.jp/>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

令和6年12月22日
ftlビジネス・スクール/ftlビー・ワーク
サービス管理責任者 高原浩